

樽商大生制作のゲーム活用 小樽署が新入学児向け教室

交通安全ルールVRで学んで



児童15人が参加した。署員が「右、左、右を見てから手を上げて渡りましょう」と指導。児童が横断歩道の前で左右確認のために顔を動かすとゴーグルが向きを感知し、安全に渡れる画面

が映し出される仕組み。北出梨紗さん(6)は「楽しかった。車が来ていないか、ちゃんと確認して渡りたい」と話した。同署交通2課の池田耕平課長はVRの活用について「今後も小樽商科大と協力し、高齢者やドライバー向けに対象を拡大できたら」と話していた。

と話していた。

(前野貴大)

小樽署は8日、小樽商科大の学生が制作した仮想現実(VR)技術を用いた体験ゲームを使い、市立稲穂小の新入学児童を対象に交通安全教室を開いた。児童は横断歩道の渡り方を疑似体験しながら、交通ルールを学んだ。

体験ゲームは、小樽商科大の木村泰知教授(社会情報学)のゼミが運営する学生企業「シーナ」とモノづくり

専用ゴーグルを付けて手を上げながら横断歩道の渡り方を疑似体験する児童

くりサークル「創作活動部」に所属する学生3人が制作。専用ゴーグルに付けたスマートフォン(スマホ)の画面に道路や街並みが映し出され、画面上で視線を動かして前に進む。

教室は市生涯学習プラザ・レピオ(富岡1)で開き、